

## リレー随筆

# 医療は面白い

総合病院 鹿児島生協病院 研修医 泊 成一郎

鹿児島生協病院，1年目研修医の泊です。随筆ということで私が医師になるまでのお話をしたいと思います。

私は鹿児島県南さつま市，旧加世田市に生まれてから，高校卒業まで，自然に囲まれた生活でした。大学進学以降は，東京や福岡などで15年働いてました。仕事は接客業や営業職，土木工事や配管工事，IT関係など，色々と浅く広くやっておりましたが，35歳の時に故郷である鹿児島の地域医療に貢献したいと思い，医学部進学を決めました。受験期間中は，体力づくりで吹上の砂浜をマウンテンバイクで走ってました。明け方にくくと，春から夏の季節には，ウミガメの産卵に立ち合えることもあり貴重な体験でした。

趣味ですが，最近は園芸やお庭づくりが楽しいです。自分で育てたオリーブや果実で，マティーニやチューハイをつくって飲みたいなと思っております。散歩も好きで，妻と休みの日はよく歩いています。特技は，配管の詰まりなど，水回りの修理は得意です。

長所ですが，学ぶことが嫌いではないので何でも学び続けることができると思います。決断したら行動がはやいです。毎日コツコツ努力するのも嫌いではないです。目立つことより裏方の仕事が好きかもしれません。あと朝早く起きることが苦じゃないです。短所ですが，昔営業職時代の上司に，嘘が下手くそと言われたことがあります。

大学生時代は鹿児島生協病院（民医連）の奨学金制度を利用させてもらいました。もともと医学部に入る前から，奨学金をもらえた

らしいなって考えてました。というのも，奨学金がもらえたら，アルバイトをして生活費を工面することに時間を費やすことなく勉強に集中できると思ったからです。実際医学部生活の6年間，思う存分いろんなことを学ぶことができました。そんな風に夢中になれる仕事に就くことができ，幸せを感じます。家族や友人，民医連の方々，本当にいろんな方々のおかげでここまでこれたと思います。

民医連の奨学生になってよかったと思うことはたくさんありますけど，特に患者さんの日常生活や社会背景について，みんなで一緒に考えて学ぶ企画にたくさん参加できた点です。例えば，病院実習での多職種カンファへの参加です。そこでは，患者さんの価値観や考え方に沿って，退院後に患者さんが日常に帰った後，どのように支援を継続していけるか？ということについて，それぞれの専門職の視点から議論が交わされていました。その時低学年だった私は，「退院した後のことについても，こんなに細かく会議で話し合うんだ。」とびっくりして感動しました。他には，生協の組合員の皆さんがもてなしてくださるご飯会に参加させてもらい，美味しい食事とおしゃべりを楽しみながら，時には組合員さんが医師に期待することや地域で困っていることを教えてもらったりしました。また，訪問診療に同行させてもらい，実際に患者さんのご自宅を訪問し日常生活を拝見させてもらったり，奄美（加計呂麻）の公民館で健康チェックをする企画などの地域フィールドワークに参加したり，とにかく机上ではなかなか学び

にくいこと、かつ、医療者として大事な視点を、患者さんとの生のふれあいを通してたくさん学ばせてもらいました。医療者になった今振り返ると、とても貴重な経験だったなあと感じます。また、奨学生として企画に参加することで、研修医として近い将来働く病院の皆さんとたくさん触れ合うことができました。今ではコロナ禍で開催が厳しい状況ではありますが、お酒や食事を一緒に楽しみながら、時には病院の成り立ちや歴史について教えてもらいながら語り合ったり、時にはくだらない馬鹿話をしたり、とにかくたくさんの思い出があります。そんな奨学生生活を通して、「ああ、やっぱりここを選んでよかった。地域医療で頑張ってるスタッフや先生方と一緒に働きたい。」という思いは強くなりました。このように学生の頃から近い将来働く研修先のスタッフや先生方と関係性が構築できたのは、私にとって非常に価値の高いことでした。というのも、先ほど述べたような実習・企画では、実際に上級医・指導医になる先生方から直接いろんなことを教えてもらうことができ、初期研修が実際に始まって働き始める前から、病院の皆さんに見知ってもらえるわけです。それで次に病院実習に行った時に、「泊くん、元気に頑張ってる?」「おお、久しぶり! だいぶ医者っぽくなってきたんじゃない?」など、声をかけてもらえると、やっぱり嬉しいわけですよ。そして、また頑張るぞって気持ちになりました。

さて、目標や理念についてお話ししたいと思います。研修が始まってもうすぐ1年経ちますが、4月にたくさん自己紹介をさせてもらう機会がありました。そこでいろんな方からいろんな質問されたのですが、特に考えさせられて印象に残っているのが、「どんな医師になりたいか?」というシンプルな質問でした。振り返って考えてみたのですが、学生時代からなんとなく考えていたのは、第一に

“患者さんが話しかけやすい医師でいたい”ということでした。もちろん、医師は専門職ですので、医師として必要な知識、基本的な考え方や判断力、技術習得は必須ですが、それよりもっと根本的な人と人が触れあうときの何かなのかもしれませんが、患者さんにとってはただでさえ非日常空間である病院の中で、その方は何かプロブレムを抱えて病院を受診するわけです。そんな状況で話しかけやすい医療者がいたら、私が患者さんなら嬉しいかなって感じてました。というわけで、まずは話しかけやすい医師でいたいと思っています。そんなの当たり前なんじゃないの? 医師が考えることなの? って考え方もあるかもしれませんが、どうなのでしょうね。少なくとも良いか悪いかということではなくて、多様性を受け入れる土壤があることは、組織や社会が成熟していくことに近づいていくのではないかと考えています。少し話はそれるかもしれませんが、病院は社会の器としての役割が大きく、そこに勤める医療者は公人としての一面があると考えております。どんな患者さんがくるかは事前にわからないこともあり、かつ医療側は患者さんを選べない環境において、医師が患者さんにとって話しかけやすい存在であること、医師が患者さんの問題解決のために労力を惜しまないこと、医師が学び続けること、医師が正直であること、このようなことが必要なのではないかと考えます。と、言葉で言うのは簡単ですが、そんな感じの理念や目標に向かって日々成長していければいいなと考えています。それとこれは先の話になると思いますが、後輩医師や学生が、“こんな病院で、この先生たちと一緒に働いてみたい”，と思われるような病院づくりの役に立てたらいいなって考えております。

鹿児島生協病院の初期研修ですが、一言で言うと、めちゃくちゃ勉強になる刺激的な研修です。具体的な内容は、実際に実習に来て、

自分で体験して下さいとしか言いようがないと思いますが、“自分達の地域を通して、医療・介護の世界で起っていることを幅広く学ぶことができる”研修なんじゃないかなって感じます。もちろん、受け身のお客状態では学べることも少ないと思います。自分の頭で考えて能動的に研修に取り組めば、どんな所でも得られる学びは大きいと思います。待ってるだけでは何も得られない、これはどこの世界でも一緒に何事も近道はないと感じています。何かに気づく眼や、問題をアセスメントして問題を解決する力は、一朝一夕で身につくものではない、日々の診療の中で、常に医学的なミクロな視点と社会的なマクロな視点を持って、自分の頭で繰り返し考えることでしか、医師の能力は養われていかないんじゃないかなって感じています。失敗して悩んで苦しいこともあります。鹿児島生協病院では同期や先輩方、ベテランの先生方もみんなが励ましてくれる、そして、また次頑張ろうと思える環境です。それと研修の話で言うと、自分がどんな研修をしたいか？という視点も大事だと思うのですが、個人的には、どんな仕事でも物事の始まりは、どのような問題があるか？ということに目を向けることも必要だと感じています。つまり、ニーズは何か？を意識することです。医療や介護の世界で言えば、鹿児島県の南薩地方ではどのような問題があるのか？を、自分で調べて考えてみることは、大事なプロセスなんじゃないかなって感じます。具体的には、この地方で特に有病率が高い疾患は？訪問診療の状況は？地元で出産できるか？夜間に小児救急で対応してくれる病院は？など、それぞれの地域特有の問題があると思います。そのような作業の中で、自分が夢中になれるものが自然と湧き上がってくることもあるのではないのでしょうか。個人的に問題を感じる分野として、認知症の診療・介護、心不全管理、腎代替療法

など、たくさんあります。あともう一つ、初期研修で危惧することは、技術習得に偏重する研修になっていないか？ということです。これは自分への戒めでもあると思いますが、研修とはいえ向こうにいるのは生身の患者さんであることを忘れていないか？、そもそも目の前にいる患者さんをしっかり診れているのか？医師として成長し続けるために自己の涵養の仕方を学び始めているか？など、1年近くの研修を振り返って、反省ポイントがたくさん挙げられました。

そろそろ締めたいと思います。医師の仕事を作り始めて感じたことですが、とにかくいろんな患者さんの人生に深く関わりあう仕事で、ものすごくダイナミックで面白い仕事だと感じています。患者さんの人生で大事にしてきた価値観に触れ、生きることや死ぬことに関する患者さんの考えに触れる、こんな稀有な仕事は他を探してもないんじゃないかなって思います。それともう一つ、医学部に入学して6年間を修了すると、ほぼ自動的に医師人生が始まります。つまり、医学部入学は大学入学であることに加えて、“入社試験”としての意味合いも含まれているなあと感じるわけです。それって良い悪いとかじゃなくて、特殊なことだなあって思い、医師として働けることに本当に幸せだなあと感じます。そして医学部入学の時も初期研修のスタートのときも、どちらも最高の仲間が待っていました。“自分で決めた人生を、思い切り楽しむ！”，医療の世界はそういう思いの人間が、年齢や性別関係なく集まっている場所でした。本当に同級生、同期、先輩や後輩とはかけがえのない存在であり、大変な勉強も研修も、仲間がいるから一緒に頑張れると感じています。

次号は、今村総合病院の先生のご執筆です。

(編集委員会)